2023 年12月10日 久宝教会 第2アドヴェント礼拝メッセージ

「どう読む聖書？」　　水谷憲牧師

聖書　ヨハネによる福音書 5章36－40節

アドベントも第2週になりました。先週の水曜日、昔の友人から電話がかかってきました。「喪中はがきもらったよ、ありがとう。実は俺の母親も今日死んだんだ」。その電話の相手の彼とは30年来の友人で、今でいうシェアハウスというんですか、一緒に暮らしたこともある親しい人物でしたが、彼の母親は長年「化学物質過敏症」という、非常に難しい病気と闘っておられたわけです。その彼のお母様が亡くなられたというので、私もびっくりして、妻の強い勧めもあり、慌てて金曜日に休暇をもらって朝一で熊本へ向かい、お葬式には何とか間に合ったので参列して、昨日の晩に戻ってきた、というところであります。お葬式は、ご自宅で持たれましたが、私たちの共通の友人で現在浄土真宗の僧侶をしている方が、枕経からお通夜から火葬から（火葬場が空いておらず、やむなく火葬を先にして、お骨にしてからの葬儀になりました）、そういう葬儀一式を取り仕切ってくださっていて、友人本人の希望もあり、またその僧侶の友人も同意して下さったので、私もキリスト教の牧師として、最後のお葬式では、読経・焼香が終わった後に少しだけ聖書とお話・お祈りをさせていただきました。そういう和洋折衷というかちょっとへんてこなお葬式でしたが、友人とお兄様、訪問看護師さんや福祉タクシーの運転手の方、そして僧侶の友人と私だけのささやかなお葬式で、みんなよかったね、と語り合えるようなものとなりました。

そのお母様の病気ですが、私たちの生活環境のなかには、本当に多くの、様々な化学物質があふれているわけです。これは、アルコールとかシンナー、シャンプーなどのようなものだけではなく、本当に自然のもの、にんにくや香辛料の香りなども含まれます。今では「香害」というような言葉もありますけれども、まさにそのような様々な香り、私たちには全く気にならないようなかすかな香りさえも身体がひどく影響されて苦しくなる病気で、現在もこれといった治療法は確立されていないといいます。私がその友人と出会った頃、もうすでにお母様はその病気で苦しんでおられましたから、少なくとも30年間は闘病しておられたことになります。ですからその彼は、お母様に会ったりお世話したりするために、市販のシャンプーやボディソープは使わないし、ニンニクや香辛料がだめなので、ほとんどの食べ物が食べられなくなりました。お母様がなくなってから、彼は僧侶の友人とカレー屋さんに行ったり、昨日も私が帰る前に一緒にラーメンを食べに行ったりしたのですが、ラーメンも10年ぶりくらい、カレーライスも20年以上食べていなかったよ、と話しておられました。そうやって彼は自分の身をお母様のお世話のために20年もささげました。幸いにもお兄様がお医者さんとして経済的に支援して下さったので、医療費や生活費は心配せずに済んだようですが、お兄様は莫大な経済的な負担を引き受け、弟は仕事につくこともせず結婚もせずにお母様に献身してきたわけで、特に弟である友人はようやくこれから自分のための人生が始まるわけですが、どう

かこれからの彼の人生が、少しでも豊かな楽しいものとなればと願っているところであります。その彼が、昨日私が帰る時に熊本駅まで見送りに来てくれて、またお通夜に駆け付けてくれた別の共通の友人を呼んでくれて、最後に3人でラーメンを食べながら近況を話しあったりしましたが、同じ熊本にいても、その二人は数年ぶりくらいだったそうで、さすがに冠婚葬祭、特に誰かの不幸の時くらいでないと、集まる機会がなくなったね、と話したものでありました。

さて、私は牧師になるためにその準備として京都の神学校を出たわけですが、高校を出てからすぐに神学校へ進んでキリスト教を学んだわけではなく、福岡県の高校を出てから最初に進んだ大学が、その熊本大学でした。入学したのは1990年でした。実家を離れ、それなりに夢と希望を携えて足を踏み入れた大学でありました。しかしそれから 4 年、気がつけば一向に卒業できる見込みがなく、自分のだめさ加減にほとほと嫌気がさして、何とかして環境を変えようとYMCAの寮に入りました。しかしそこでまた私は新たに3年間を暮らすことになり、かなり余分な時間をかけてしまったわけですが、しかしその最後の3年間の中において、私は聖書と出会い、教会と出会い、キリストと出会い、今でもつながるその友人たちと出会い、ついでに言うと現在の妻とも出会いが与えられました。私にとっては、その最後の3年間こそが、熊本での7年間のうちで最も密度の濃い青春の日々となったわけです。その意味で両親には、本当に忍耐を強いたなあと申し訳なく思う気持ちとともに、本当に感謝をしております。

私がその最後の3年間を暮らしていたYMCAの寮では、週に一度寮生が集まって、聖書を読む会が行われていました。聖書の中の「マルコ福音書」だったり、「使徒言行録」だったりについて、寮生が毎週持ち回りで少しずつ担当して、註解書で調べた事やそれを読んだ自分の気持ち、考えなどを発表し、それに対してまたみんながいろいろと感想を言ったり意見を述べたりする、つまり発表されたものをみんなで分かち合うような形で通読していくというものでした。しかし、寮に入ったばかりの頃の私は、教会へも行き始めたばかりで、実際聖書をどう読んでいいか全く分からなかったのです。福音書におけるイエス・キリストについての多くのエピソードについて、例えばどう思うかと尋ねられた時にも、「いやーどうって…すごいと思います」という感想だけで終わっていたり、あるいは「いや実際のところはこうこう、こういう事だったんじゃないか」などと、何とかして合理的な説明を付けようとしたりしていたものでした。私は、教会に行くようになって本当に様々な人々と出会うたびに、何か信じるものを持っているとか、心の支えになるものを持っているその姿をうらやましく感じていたのですが、その一方で私は、信仰を持つということは、聖書の言葉や聖書の出来事をそのまま無批判に受け入れ信じることなのだと思っていました。ですから、「聖書の記事を事実として、『はい、そうですか』とすぐに信じることのできない私には、信仰を持つことは無理なのだ」とあきらめておったわけです。さらには、そんな信仰を持ってない私が聖書を読んでも何の意味もないのではなかろうか、とまで感じていました。このように、聖書の話を素直に受け取

ることができず、その出来事の裏に隠されている意味や、イエスの言葉の裏に流れている思いなど、そこまで想像を働かせて考えることのできなかった私には、一体何のために聖書を読むのか、どう聖書を読んだらいいのか全く分かっていなかったのです。聖書を読む会は何を言っても受け入れてもらえる場ではありました。「分からない」「こんなことありえない」そういう言葉も言わせてもらえる、聞いてもらえる場でありました。しかし、それでも当時の私には聖書を読むことが楽しくて意味のあることとはあまり思えませんでした。

しかし、そんな時、聖書研究会の場で、寮のある先輩がこんな事を言いました。「イエスの生き方はロックンロールだ」。私にはとても刺激的な言葉でした。イエスは、社会の底辺の人たちと共に生き、彼らのために、彼らとともにこの不誠実な世の中を変えようとしたのだ。そして彼のその行いや教えが、社会の体制を維持していく側にとってはとても目障りなもの・危険なものであったために、イエスは反逆者という濡れ衣を着せられて捕らえられ、殺されたのだ。大事なのは、イエスが奇跡を起こしたとか起こさなかったとかそんなレベルのことではなく、イエスがどう生きたか、イエスが何と闘っていたのか、彼が命を削り命を献げてまで、私たちに何を訴えようとしていたのかなのだ。

それから少しずつ、聖書の面白さというものが分かりはじめていったように思います。思えば、福音書においても、キリストは御自分がなさった癒しの業について、誰にも話さないようにと強く口止めをしておられる。それは奇跡ばっかりに目を奪われると、キリストがこの世に・私たちの間に降って来られた本当の意味が見えなくなるからです。私たちは、例えばキリストが手のなえた人を真ん中に立たせたとか、子どもを抱き上げた、徴税人や罪人と共に食事をした、誰それに目を留められた、声を掛けられた、などなど、挙げ始めるときりがないほどの、キリストの何気ない愛のしぐさにこそ目を向けていくべきであり、また「山上の説教」をはじめとしてキリストが様々な場面で語られた一つ一つの言葉にこそ、耳を傾けていくべきなのです。本日の聖書ではキリストが「父が私に成し遂げるようにお与えになった業、つまり、私が行っている業そのものが、父が私をお遣わしになったことを証ししている」と言っています。奇跡物語などというもの珍しい事柄、人目を引くような業だけを、神がキリストにお与えになったわけではない。そんなことだけが、キリストのなされた業ではない。そうではなく、日常におけるキリストの、私たちには何気ないもののように見える一つ一つのしぐさやさりげない言葉そのものが、神がキリストにお与えになった業、すなわちイエス・キリストの行われる業であり、それらの業こそが、神がキリストをお遣わしになったことを雄弁に証ししているというわけなのです。

有名なクリスマスの降誕物語もそうです。この不思議な出来事を科学的・学問的に研究していると、様々な矛盾に突き当たるわけです。しかしそんなことを調べ上げて「実はこうだった」などと言ったところで、そのほとんどは私たちにとって何の救いにもならないし、永遠の命につながるものともならない。そうではなく、大事なのは、キリストが若いマリアとヨセフの夫婦に与えられたということ、飼い葉おけ

に寝かさざるを得ないような貧しいところに生まれたということ、当時共同体から除外されていた羊飼いに真っ先にその知らせがもたらされたこと、あるいはユダヤ人に差別されていた外国人にもその知らせがもたらされた、つまり世界中のすべての人に神の愛と救いは開かれているのだということ。そのようなことにこそ、私たちは目を留めて聖書を読んでいかないといけない。非日常的な出来事、神がかりな不思議な出来事のみに捕らわれるのではなく、もっと大きな流れの中、聖書が伝える日常の風景の中で聖書が伝えようとしているメッセージを、私たちは受け取っていかないといけないのではないかと思うわけです。

今日のイエスが話をしている相手であるユダヤ人たちも、ちょっと焦点のずれた聖書の読み方をしていたようです。例えば、「人は死んだら天使のようになると言うが、実際にどんな服を着ているのか、何色の服か」などそんなことを一生懸命研究したりしておったわけです。他にも「薔薇の名前」という映画でも描かれていたように、中世の修道士や司教たちは「イエスは笑ったことがあるか、ないか」「イエスの服は財産か？」などということを大まじめに議論しておりました。そうやって彼らは彼らなりに永遠の命を聖書に探そうとし、研究をしておったわけです。ただそうやって永遠の命のヒントを聖書から読み取っていこう、拾っていこうという姿勢は我々も大いに見習うべきなのでしょうけれども、しかし「聖書は私について証しをするものだ。それなのに、あなたたちは、命を得るために私のところへ来ようとしない」（ヨハネ 5：39−40）とキリストも言われるように、永遠の命はキリストのもとへ行くこと、すなわちキリストを信じ、キリストに従っていくことでしか得られないのです。キリストは「探しなさい。そうすれば、見つかる」（マタイ7：7）と言われますが、聖書の中に隠されているという永遠の命は、探した結果、やはりキリストに従うことによってしか得られないんだということが分かる、というわけです。

ルカ10章の「善いサマリア人のたとえ」の冒頭部分においてはこうあります。「――すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」――。キリストは「あなたは聖書をどう読んでいるか」と尋ねられ「それを実行しなさい」あるいは「行って、あなたも同じようにしなさい」などと促されます。クリスマスを前にして、私たちは改めて聖書をどう読んでいったらいいのかというところから考え直していけたらと思います。キリストをめぐる華々しい情景のみに目を奪われるのではなく、ひっそりとした本当のクリスマスの情景からその意味、すなわち私たちに対する神からの隠されたメッセージを見出し、そのような中で生まれた日常風景の中のキリスト・イエスを見つめ、その姿に従っていくことによって、キリストの言われる「自分の内に父のお言葉をとどめ」る者とされたいと思います。